子どもたちを助けたい 生活支援きめ細かく

NPO法人アスイク
（仙台市）

東日本大震災の避難所で子どもたちの学習サポート活動を行ったことをきっかけに、貧困や不登校といったさまざまな課題に向き合い、活動の領域を広げてきたNPO法人アスイク（仙台市）。行政とも連携し、宮城県内36カ所に学習・生活支援の拠点を運営する。

代表理事の大橋雄介さん(41)は、人材大手グループ企業で組織・人材開発のコンサルティングを経験し、独立してNPOの活動を始めた社会起業家。「貧困や不登校は震災前にもあったが、気づかれにくい人もいた。それが目の前の課題として広く認識されたきっかけが、震災と避難生活という非常時の社会環境だったのではないか」と考え、災害（有事）が起きてからではなく、日常生活（平時）の中で子どもたちを支援する仕組みを構築することに力を注いできた。

震災後も、豪雨、地震、新型コロナウイルスと、「百年に一度」「数十年に一度」の災禍が相次ぐ。自ら声を上げられない、あるいは救いの手段を知らない子ども（時には親も）は、弱い立場に追い込まれがちだ。アスイクは「困っている子どもや親の味方が、たくさんいる社会」というビジョン（実現すべき目標）を掲げる。さまざまな事情の子どもが学校でも家庭でもない場所で自習や生活相談の機会を得られる「学習・生活支援」に加え、子ども食堂や食料支援、保育所運営にも事業を拡大。2020年度には宮城県内で975人の子どもを何らかの形で支援する存在になった。

アスイクは、会社でいえば社訓のような原則をいくつかの短文にまとめている。その一つをバリューといい、現場で大事にしたい価値観として「受容」「共に考える」「挑戦」「楽しむ」の四つの見出しを掲げている。どんな組織も、社会が変化したり、メンバーが増えたりすると、互いの思いが見えなくなっていくもの。初版は16年に策定されたが、スタッフ同士が意見を出し合うワークショップを経て、19年に現行の改定版になった。「バリューを作ること自体が狙いではなく、ワークショップの過程で、スタッフ同士がしっかりと目標を共有することができ、結束が強まったことに意義がある」と大橋さん。

アスイクが指定管理者として運営に参画する仙台市若林区の荒井児童館。アスイク職員の土田夏鈴さん(26)は中学3年の時に東松島市で東日本大震災に遭い、一時避難生活を送った。高校時代の担任の紹介でアスイクとは別の団体の学習支援を受け、好きな英語を生かして大学に進学した経験がある。「親にも先生にも言いにくい悩みを、支援団体の職員さんに相談し、勇気づけられた。そういう頼れる大人を目指したい」と、大学時代に知ったアスイクの活動に共鳴し、就職した。荒井児童館のある場所は震災当時、仮設住宅があり、設立初期のアスイクが支援活動を展開したゆかりの土地でもある。土田さんは「気負わずに、子どもたちに寄り添っていきたい」と、柔らかな表情で抱負を語った。

2021年に開催した10周年記念シンポジウムで初めて勢ぞろいしたスタッフ
※短時間に限りマスクを外して撮影しました

大学生のボランティアらを募り、避難所で展開された学習支援

写真左／フードバンク「プラアス」の約700世帯の荷造りに汗を流すスタッフ　写真右／仙台市荒井児童館に通う子どもたちが作った張り絵の前で（左から土田さん、大橋さん）

NPO法人アスイク

東日本大震災直後の2011年3月28日に任意団体として発足。当初は避難所で、後に仮設住宅での学習サポートを開始。同9月に法人登記完了。自治体連携による学習支援拠点を宮城県内各地で運営する一方、フリースクール、子ども食堂、保育園などに事業領域を広げてきた。事務所は仙台市宮城野区。従業員125人、ボランティア400人。